

鵜飼一彦先生を悼んで

東京工業大学大学院総合理工学研究科 内川 恵二

鵜飼一彦先生が2009年11月1日に急逝されました。享年58歳の若さでした。この鵜飼先生の突然の訃報に接して日本視覚学会の関係者一同、驚愕したと同時に、深い悲しみを覚え、なぜ鵜飼先生がこんなにも早く亡くならなければならないのかという人の運命の理不尽さにやるせない気持ちで一杯でした。鵜飼先生は日本視覚学会の創設時からその運営に携わり、現在では学会にとってはなくてはならない存在でした。学会を常に正しい方向に導いてくれる重鎮として会員から大きな信頼を集めておられました。

鵜飼先生は1974年に早稲田大学理工学部応用物理学科をご卒業後、1979年に早稲田大学理工学研究科博士課程を単位取得満期退学され、北里大学医学部助手・講師(1979-1996年)に就任されました。その間、1988年に「視覚系の調節機構に関する研究：静的および準静的特性の解析」(早稲田大学)で理学博士を取得されています。その後、日本福祉大学情報社会科学部教授(1996-2002年)を務められ、2002年に早稲田大学先進理工学部応用物理学科に教授として着任されていました。鵜飼先生のご専門は眼光学、調節、瞳孔、眼球運動、映像とディスプレイの分野であり、国内外を問わず研究の第一線で活躍され、この分野の日本の視覚研究を先導的に引っ張ってこられました。

私が鵜飼先生に初めてお会いしたのは、三十数年前の学生時代まで遡ります。当時は生理光学研究会が年2回冬と夏に合宿形式で開催され、鵜飼先生も学生として毎回参加されていました。私も同世代の若者として夜遅くまで視覚研究について、また人生について熱く語り合ったことを今でも鮮明に記憶しています。鵜飼先生は昔からずっと変わらず、常に日本の視覚研究が発展することを強く望まれ、日本視覚学会が同好の士の小さな集まりの生理光学研究会から発展し、さらに国際学会APCVを主催するに至るまで、学会を内側から支える大黒柱としての重要な役割を果たされてきました。編集委員長としてVISIONの編集を一手に引き受け、毎回きちんと発行し続けてこられたことは、まさに「余人をもっては代えがたい」鵜飼先生のなせる技であると誰もがその存在の大きさに改めて驚嘆していたところです。鵜飼先生の学会に対する貢献は計り知れないものであり、もし



写真1 スタンフォード大学にて(2007年9月)



写真 2, 3 カリフォルニア, バークレイ駅にて (2007年9月)

鶴飼先生がおられなければ現在の日本視覚学会は誕生していなかったと言っても過言ではありません。

鶴飼先生はその気さくな人柄から交際範囲も広く、また多彩な趣味の人としても知られていました。鉄道はその一つで、機会があるごとに世界各地をあちこち盛んに鉄道で旅をされていたようです。上記の写真はカリフォルニアのバークレイ駅からサンノゼに向けてアムトラックで出発する時の様子ですが、このような楽しそうな鶴飼先生にもう会えないかと思うと残念でなりません。鶴飼先生は日本の視覚研究の開拓者であり、また優れた指導者でした。彼を失ったことは学会にとって計り知れない損失です。残された我々が鶴飼先生の視覚研究に対する意思を引き継ぎ、今後、視覚研究の発展に尽くさなければならないと身の引き締まる思いです。

鶴飼先生のご冥福をお祈りします。